



連載Ⅱ
当財団専門委員
わたしの1冊
第6回

一橋大学大学院 商学研究科 教授

根本 敏則

『津軽』

太宰治著

「津軽」は故郷へ旅する愛（かな）しさを疑似体験できる1冊である。

太宰は津軽の大地主である津島家に生まれた。弘前高校時代に芸者遊びを始めてHと親密となった他、マルクス主義にかぶれて津島家の横暴を告発する小説を書いている。高校卒業後に東大仏文科に進学し、Hを東京に呼び寄せ同棲を始めた。並行して政治活動にも参加したが、手段を扒ね政治活動に絶望し脱落する。その後、心中未遂を起こしたり、縊死を企て失敗したり、薬物中毒になったり、Hと心中未遂後に離婚するなど生活は荒んでいく。しかし、御坂峠での長期滞在中に出会ったMとの結婚を契機に心身ともに健康となり、「津軽」など今日においても高く評価される多くの小説を執筆することとなった。

私も生まれ育ちは津軽である。新制弘前高校を卒業後に上京し東工大社会学科に進学した。入学直前に陰湿な浅間山荘事件があり、キャンパスには政治活動に興味を持つ学生は少なくなっていた。太宰ほど過激に人生を送れるはずもないのだが、大学在学中に津軽に残したAと遠距離交際をし、大学4年次に求婚するも、あっけなく断られる。自意識過剰だったので大きく傷つくわけだが、1か月もすれば別の女子学生に言い寄ったりしている。結婚のため卒業直後の就職

を考えていたが、その必要はなくなった。少しずつ標準語で論文を執筆する楽しさも分かってきて、大学院に進学することとなった。

太宰は上京してから故郷に帰っていないが、今回、十数年ぶりに津軽を旅行した。太宰は津軽が好きである。いや、正確には津軽は故郷なのだから理想的存在で居続けなければならぬ。したがって、太宰の美意識にそぐわない風景は容赦ない罵倒を受けることになる。しかし、母親代わりに育ててくれた女中のだけは別格である。たけは母であり、太宰の身体そのもので批評の対象にならない。その時に交わしたたわいないやり取りを書くしかない。ところが、それで充分である。たけと会い、太宰は自分も津軽人であることを確認できたのである。

今、私は五能線のリゾートしらかみの車中にいる。この「撫（ぶな）」と名付けられた新型車両に乗り込んだ時には、都会人に媚を売っているようで落ち着かないと思ったわけだが、バーカウンターでは酒をいくら注文してもかまわないという。きつと飲まない家から配給酒を集めてきたに違いない。前言撤回。この車両、目を見張るほど小綺麗で、普請も薄っぺらではない。しかし、それにしてはだんだん酔いが回ってきた。あと少しで弘前だ。Aに会えるはず。「今行くはんで、待ってでける。」（ねもと としのり）



根本敏則（ねもと としのり）

一橋大学大学院商学研究科教授。1981年東京工業大学大学院理工学研究科社会学博士課程修了。スウェーデン道路交通研究所客員研究員、フィリピン大学交通研究所客員教授、一橋大学商学部教授を経て2001年から現職。2002年04月～2003年03月はプリティシユコロンビア大学交通研究センター客員研究員。日本物流学会会長、日本計画行政学会会長、世界交通学会学術委員会委員などを歴任。近著に『現代交通問題 考』（共編著）成山堂書店、『ネット通販時代の宅配便』成山堂書店、『自動車部品調達システムの中国・ASEAN展開～トヨタのグローバル・ロジスティクス』（編著）中央経済社など